

乳幼児におけるHib・肺炎球菌ワクチンの歴史

- **【Hib】** 2008年12月に国内で接種可能になったが、当時は任意接種であったことから保護者の費用負担が大きく、2010年11月26日から臨時特例交付金が交付されることで、接種に際しての自己負担額が軽減された。その後、2013年の予防接種法改正により、同年4月1日から定期接種に導入され、A類疾病として実施されることになった。
- **【肺炎球菌】** 2010年2月に、7価ワクチンが任意接種として接種可能になった。2010年11月26日から臨時特例交付金が交付されることで、接種に際しての自己負担額が軽減された。その後、2013年の予防接種法改正により、同年4月1日から定期接種に導入され、A類疾病として実施されることになった。また、同年6月には現行の13価ワクチンが承認された。

乳幼児におけるHib・肺炎球菌ワクチンの効果

- **【Hib】** 2013年の5歳未満人口10万人当たりのHib髄膜炎罹患率が0.17となり、公費助成が開始される前の平均罹患率と比較して、98%の減少となった。2014年には、同罹患率はゼロとなった。
- **【肺炎球菌】** 血液や髄液から肺炎球菌が検出されるような重篤な肺炎球菌感染症にかかるリスクを95%以上減らすことができると報告されている。

高齢者における肺炎球菌ワクチンの歴史と効果

- 平成 22年2月 の「予防接種制度の見直しについて（第一次提言）」での議論を踏まえ、平成24年5月にとりまとめられた「予防接種制度の見直しについて（第二次提言）」の中で、高齢者の肺炎球菌ワクチンの接種推進が望ましいとされた。
- 平成25年4月に立ち上げた厚生科学審議会予防接種・ワクチン分科会等で専門家により技術的な整理が行われた。
- 平成26年10月1日より、高齢者を対象とした肺炎球菌ワクチンが定期接種に導入され、B類疾病として実施されることとなった。

【効果】 日本のmulticentre prospective study

⇒すべての肺炎球菌性肺炎に対して 27.4% (95%CI:3.2-45.6)、

PPV23血清型に対して 33.5% (95%CI:5.6-53.1)の防御効果

スペインのprospective cohort study

⇒肺炎による死亡リスクを減少 (HR:0.28 95%CI:0.09-0.83)

参考：感染研ホームページ 高齢者の肺炎球菌ワクチンの定期接種について

Suzuki M, et al. Serotype-specific effectiveness of 23-valent pneumococcal polysaccharide vaccine against pneumococcal pneumonia in adults aged 65 years or older: a multicenter, prospective, test-negative design study. Lancet Infect Dis. 2017;17:313-21.

Vila-Corcoles A, et al. : Protective effect of pneumococcal vaccine against death by pneumonia in elderly subjects. Eur Respir J 2005; 26 : 1086-1091